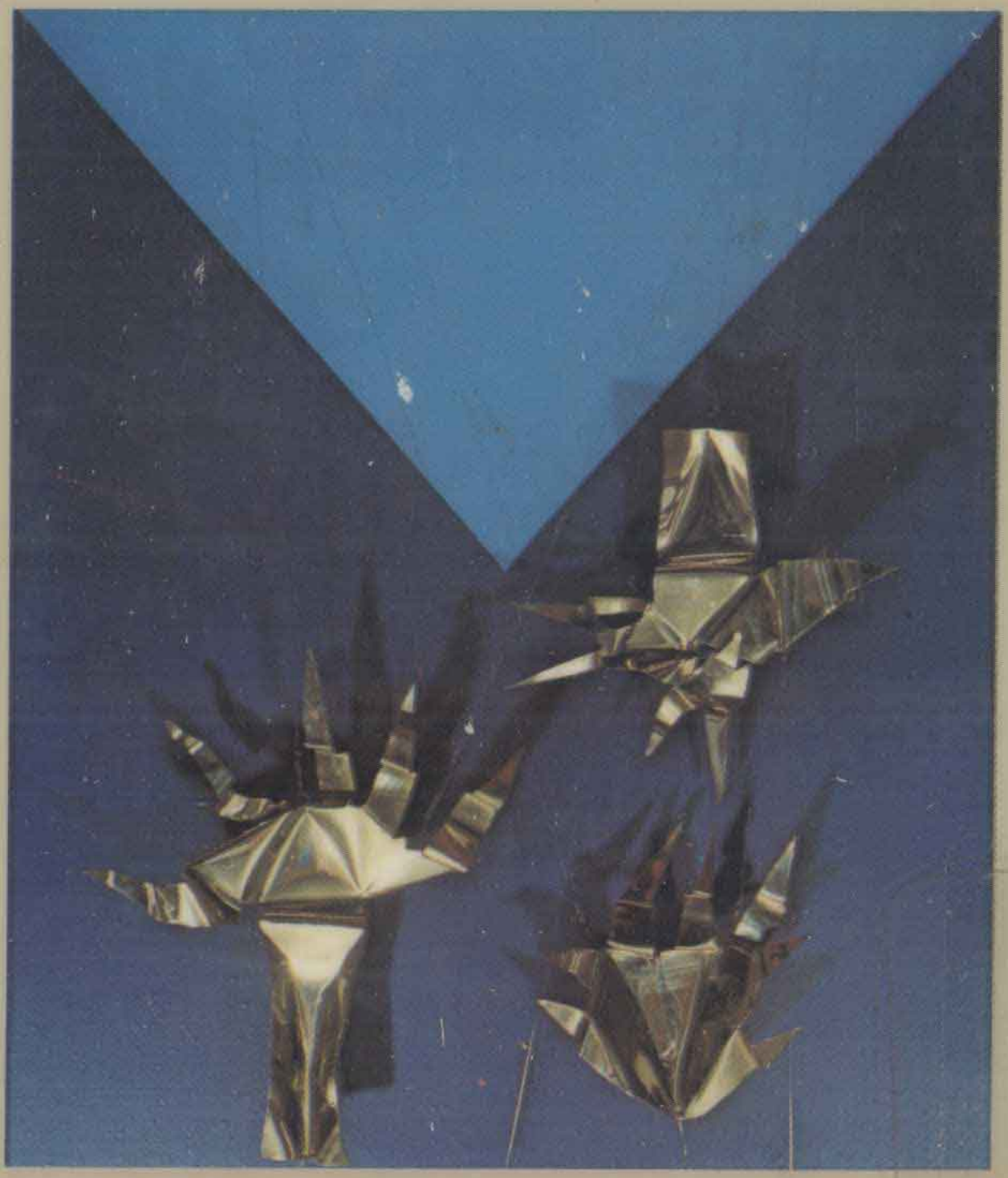
鱶（ふか）の谷　他六編

井上光晴



旺文社文庫

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕　小田切進　茅誠司　木村毅
中島健蔵　森戸辰男　（五十音順）

旺文社文庫　鱶の谷（ふか）　他六編　定価はカバーに表示してあります

昭和49年2月10日　初版印刷
昭和49年2月20日　初版発行

著者　井上光晴（いのうえみつはる）
発行者　鳥居正博
印刷所　旺文社専属　日新印刷株式会社（中村印刷・穴口製本）

発行所　株式会社　旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話　東京 (03) 267-1111〔代〕

0193 | 611-37 | 0724　811139

© 旺文社 1974
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

鱶の谷

（他）三号桟橋・長靴島・ガダルカナル戦詩集・坑木置場・雪とパラソル・完全な堕落

井上光晴著

旺文社

目次

三号桟橋 一五
長靴島 五五
ガダルカナル戦詩集 一一三
坑木置場 一八五
雪とパラソル 二三五
完全な堕落 二四三
鱶の谷 二七五

解説——時代および自己に抗する文学 小田切秀雄 三四一
代表作品解題 笠原伸夫 三六七
参考文献 三七三
年譜 三七四

写真 石黒健治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三号桟橋

西九州・R港。一九五三年初秋。

島村順――二七歳。劇作家。地方の民主主義演劇運動に従っている。R港市で劇団《国境の会》を組織、その主宰者。日本共産党を二年前離党した。

新道美也子――二四歳。M倉庫会社勤務、英文タイピスト。《国境の会》に所属。

津上良吉――新道美也子の夫、三一歳。日本共産党非合法活動に従う。

伊藤ミキ――かつて島村順と同棲。現在別れて東京方面の党活動に従う。二六歳。

片淵――年齢も本名も不明のスパイ、挑発者。日本共産党に潜入。後、暴露されて逃亡した男。

佐々少年と愛犬ロク。

1

少年がハーモニカを吹く間中、咽喉をころころとふるわせて犬が吠えた。（それは吠えるというより鳴くという方が適当だったが）呼吸をするために時々少年がハーモニカをやめると、もっと吹けもっと吹けと催促するように、おうおうおうおうと犬は吠えた。少年のまわりには海岸の男たちがもの珍らしそうに七、八人立っていたが、少年がいつまでも同じ曲ばかり吹いているのと九月の太陽がまだジリジリと照りつけるので、すぐ飽きてしまって、汚れたハンカチで首筋をこすりながら去っていった。

島村順は市営桟橋の待合室の中で、さっきから黙って少年の吹くハーモニカを聞いていた。犬は長くそして断続的にものを乞うように鳴きつづけ、その犬の首輪に「ハーモニカに合せて私は歌います」と四角なペン字で書かれたボール紙がぶら下がっていた。

「何だ、それだけか」と、立っている男たちの中の誰かがいった。「豆腐屋の笛にだって犬は鳴くぞ、もっと別のことをやれ」またその男はいった。「猿まわしなら知っているが犬まわしははじめてだ」と、後からきた男がひやかすと皆がどっと笑った。犬はいつまでも同じ調子で低く地を舐めるようにして吠えつづけ、男たちは退屈してぞろぞろ帰りはじめた。「おい、黙っていたって商売にならんじゃないか、しかし、立派な犬だな」さっき「犬まわし」といった男は五十円札をぽいと少年の前に投げた。

「ありがとう」少年はこっくり頭を下げた。犬をほめてもらったのが嬉しかったらしかった。「何

だ、現金な奴だな」五十円札を投げた男（帽子はかぶっていなかったが、それは船員らしくみえた）は笑いながら製氷会社の方に歩いていった。

少年は、ポケットに五十円札をしまうと、代りに黒カリントの入った袋を取りだしてぱらぱらと犬に投げた。「ほら、ロク。今日は俺、気分がわるくてすまんかったな」その言葉に思わず島村は笑いだして少年に声をかけた。「気分がわるかったので、あんなに今日はむっつりしていたのか」

少年はびっくりして後をふりむいた。「何だ、きとったのか、おじさん」

「うん、さっきからここにいたよ」

「ふーん」

少年は袋の残りのカリントをいっぺんに自分の口に入れてしまうと、のっそり立上って島村の方に歩いてきた。

「姉さん、みつかった。まだ……」島村も待合室を出ながら少年に聞いた。少年は答えず、いつものしぐさでハーモニカの低音部をボウと鳴らした。

「そのうちみつかるよ、くよくよするな……それよりまた何か吹いてくれないかな」島村は少年を慰めるようにいった。

「じゃ、吹こうか」少年はハーモニカを舌でしめらせた。島村は繋柱と繋柱の間の太い鎖に腰をおろして海の方を眺めた。雲が低く、風もないのに、海全体が小さい泡のようなものをぶつぶつ波立たせて、その波と波の間を野菜をいっぱい積んだ一艘の発動機船が、河口の青果会社に向けてよたよたと走っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「じゃ吹くよ、おじさんの好きな《暗い雨》だ。ロク鳴くな」少年は犬の耳をひっぱっていった。たくみなハーモニイで少年は「ああああなたを待つ暗い雨、重い革命……」ではじまるロシエの一節を吹奏しだした。音ははじめロシヤ革命直前自殺する時、アルマン・ロシエが奏でたというヴァイオリンのように淡く暗く、そして島村たちの坐っているコンクリートの岸壁に打ちつける波の上を重く漂い流れていった。

じっさい今年の四月、新制中学一年を終えてすぐ飛びだしたという（それだけがわかっていた。少年の過去も経歴も、家族のことも何一つ少年は島村に話さなかった。ある時島村がしつこく少年にききだして、ただ一つ「姉さんをたずねている」という答えを彼は少年から引出しただけであった）少年にしては、異常なほどの音楽の理解力を持っていた。《暗い雨》にしても島村が古い雑誌から切り抜いた楽譜を持ってきてやると忽ち覚えてしまった。しかもハーモニカ一本で。

「息苦しい翼の下で私は耐える、ああ羽撃かぬ暗い翼……」少年のハーモニカもだんだんその暗い翼のように揺れはじめた。ロクが鳴きだしたので、少年はハーモニカを吹きながら右手でまた犬の耳をひっぱった。ハーモニカだけでなく何かこの少年には異常なものがある。島村は対岸の造船所のガントリークレーン(1)を眺め、なんとなくそう思った。はっきりとは顔も覚えてはいないという姉をたずねるこの少年の放浪（ハーモニカで稼ぎながらの旅）には島村の解しえない何かがひそんでいるような気がした。港に浮かぶ標燈に一斉に橙色の明りがともり、少年の《暗い雨》は終った。

（1） gantry crane（英語）高架式の移動起重機。

島村はそのままじっとしていた。

「おじさん。ずっとおる、ここに？」少年はきいた。

「うん、もうしばらくね……ハーモニカはありがとう、とてもよかったよ」

少年は恥ずかしそうに犬の頭をなでた。そして「おばさん今日はおそかね」とまじめな顔つきでいった。

「うん、おそい……」島村は少年をみてちょっと苦笑した。

島村は少年と一緒にぶらぶら油会社に沿って歩きだした。ロクが時々思いだしたように咽喉をころころ鳴らし、そのたびに少年から耳をひっぱられた。

「だんだん海の風が重うなってくるね、おじさん」少年は大きく呼吸した後でいった。「うまいことをいうね」といい、島村は足をとめた。ふっとさっき坐っていた岸壁のところで彼を呼んだような気がしたのだった。島村はふり返ったが誰も見えず、酔っぱらった男が一人、じゃぁじゃぁ小便を海にむかってしているだけであった。その時、彼の眼にちらりと横縞のスカートがみえ、それがみるみるうちに大きくなり、その両手を肩にくっつけるようにして大股に歩いてくる恰好はまさしく新道美也子であった。

「あ、おばさんがきたよ」少年は指さした。

「うん、それじゃまたね、この次またチャンポンをおごるよ……」少年は「ロク、こい」といってくるりと後むきになり、足早に油会社の通路を曲っていった。

深く切れこんだ瞼の奥で何かを発するような、それでいてひどく乾ききった表情をして美也子は

島村の後に立っていた。

「ハモニカ少年」美也子は自分の吐く息を抑制するようにいった。紺色のピケ[1]のブラウスが激しく揺れ動き、彼女は正確に言葉のでない自分の唇をもどかしそうにひきつらせた。ひどく急いできたな、と島村は思った。

「どこにいく、その待合室でもいい、私はどこでもいいのよ、そこの待合室に坐りましょうか」せかせかした口調で美也子はいった。

「待合室は変だろう、いつもだから。あそこの売店のおばさん妙に思っているよ、きっと……」

「A島行汽船キップは当店で扱います」と書いた桟橋売店の方をちらとみて島村はしぶった。

「じゃ、どこにする、どこにしましょうか、私少しならお金あるのよ」何か話していなければ不安で仕方がないといった声で、美也子はばさばさになった髪をしきりになでつけた。

「金あるっていくら位、俺はめしをたべたいんだ、昼から食っていない……」

「三百円よ、二百円なら今日使える、どこにいきましょうか」

島村と美也子はさっき少年の曲ったもう一つ手前の通路をガス会社の方に歩きだした。「何か話があるって……」島村は美也子にいった。あたりはすっかり暗くなって海岸引込線の赤いライトが魚市場の前の海にぎらぎら映っていた。

「ええ後で……話って別にないのよ、ただ」

(1) pique〈フランス語〉織物の名。木綿または毛織物の布面に模様状の凹凸のあるもの。

「ただ……」
「うん、なんでもないのよ」
「何かあったのか、誰からか何かいわれたのか、俺たちのこと」
「ううん、誰も何ともいうもんですか、俺たちのことって何でもないじゃないの」
「……」
「ごめんなさい。……なんだか今日はひどく苛々してしまって……」
彼女は島村の肩を背後から押すようにして歩きつづけた。二人はまた岸壁を折れ狭い裏路に入った。「こんなにいつも人通りのない裏路ばかり通らなきゃならないから、よけい苛々するのよ」島村は黙っていた。しばらくしてまた美也子は「ごめんなさい」といった。「ごめんなさい、私、変なことばかりいって、今日どうかしてるわ」
「ここではいいけど皆の前ではきちんとしてくれよ、芝居の時……」
「きちんとですって、どうやってきちんと……私たち何でもないじゃありませんか」
つまらぬことをいってしまった。島村は顔をしかめた。「何でもない」美也子は低く自分にいいきかせるようにつぶやいた。それが島村には「何から」というふうにきこえた。
「何から……何が」
「……」彼女は薄い（口紅のついていない）唇を強く噛みしめて、瞬間、黒い眼をきらりとさせた。材木会社の柵にたてかけてある材木が暗闇の中でぼうと白く浮かんでみえた。二人はその材木会社の前を通ってガードをくぐり、小さな喫茶店とも食堂ともつかぬ所に入った。

「こんなところは高いよ」島村はいった。いったん坐りかけた椅子をぱたんと後にずらして「じゃ、よしましょう」と美也子はあっさり表にでた。店の奥からあわてて誰かがでてきたようだった。

「どうしたんだ美也子さん、今夜はおかしいよ」追いすがって島村はいった。

「しばらく海にいきましょう。私、本当に今日どうかしている……」

島村は美也子の右腕の手首を何となしに後から握った。彼女はぎくりとしたように、彼の横顔をふりむいた。「二ばーん線、通りまーす。二ばーん線、通過しまーす」引込線の踏切りに通告する構内の信号アナウンスが叫んでいた。二人は踏切りを引返し、またさっきの魚市場のみえる海の石段にでた。

「津上から何かいってきたのか」島村はきいた。

「何もいってなんかこないわ、……どうして津上のことを」

新道美也子はその瞬きもしない瞳をぐいとあげて島村をみつめ、そしてもう一度「何もいってこないわ」と彼にいった。

2

一昨日の夜と同じ魚市場のみえる岸壁から島村は三号桟橋の方に歩いていった。何か重い、それでいてからからと咽喉(のど)全体がひからびてしまうようなものを引きずったまま（その感じは一昨日の夜からつづいていたが）「美也子がくるまであと十五分ある」と彼は思った。

島村は静かに、それでいて一歩一歩噛みしめるような足どりで岸壁を歩き、三号桟橋の所からま

たさっきの地点まで引返した。美也子を愛するということはどういうことか……かつて俺の友、非合法生活者津上良吉の妻を愛するということは……。

幾本も幾本もある機帆船のマストの影が少しずつ長く島村の足もとに落ちはじめていた。美也子と俺の間に厳然と冷たく横たわる壁、横たわらせねばならぬ壁。……それにしても一昨日の夜はひどかった。美也子はその壁を自分から打破ろうとして、或はその壁に押しひしがれて、迫り、そして狂い泣いた。しかし……。

島村はふたたび三号桟橋の方に引返した。どうしたことか今日は少年の姿は見えなかった。彼は自分の腕時計を正確な時間に合せようとして汽船の待合所に入っていった。電気時計と自分の時計と三分しか違わないので、針を進めたものかどうかを考えているうちに、彼はふっと前を通っていく男の横顔をみた。「あっ……あの男だ」島村はとっさに飛び上るようにして、出ていったその男の後を追い、追いながら自分の考えを急いで懸命にまとめた。あの男がいた。あの男はR港市にいた。あの男はR港市に帰ってきている。……

男は薬屋の角をまがった。心臓が急にひきつるような音をたて、同時に島村の足はぴくぴく顫えた。彼もT薬局の前を走って抜けた。男はまるで島村の尾行を気づかぬふうに、ゆっくりと、しかしかなりの歩調で（そういった歩み方で）そのまま直線に電車線路の方に歩いていった。

島村はだんだん喘いでくる自分の呼吸を握りつぶすほどの激しさで呑みこみながら、二十米位後から男をつけた。

「あの男――片淵が俺の眼の前に、いた。……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com